

人にすぎないことを覚えておく必要があります。私たちの知る限り、18~20 世紀の間、何万人ものポーランド人がシベリアに移住し、この地域の文明と文化の発展に大きく貢献しました。だからこそシベリアは大変有意義な領域なのです。流刑者のうち何人かはカムチャツカに送られ、日記や興味深い回想を書いた人もいます。=前頁上左写真=

こういう風に、シベリアでのユゼフ、サハリンでのブロニスワフの流刑と活動が、形式は短いけれど、内容は面白く語られます。展示スペースに入ると照明が徐々に暗くなり、スピーカーから録音されたシベリアのシャーマンの声と説明が聞けます。

(Jadwiga Rodowicz-Czechowska, スレユヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館学芸員、元駐日ポーランド大使)

新刊紹介

『エカシの森と子馬のポンコ』

加藤多一(作)、大野八生(絵)

ポプラ社

2020.12

『少女からおとなになる子馬のポンコを
やさしいまなざしで描く物語』

この児童書が手許に届き、先ず表紙のあどけない子馬のまなざしと目が合いました。そのイラストのすぐ下の帯の冒頭にはこう記されています。

「当然、“やさしいまなざし”を発しているのは、著者加藤多一さんご自身であり、その多一さんがこれまで有形無形の育みを受けた故郷のご家族や、多くの友人、そしてこの大地と包み込む大気、草や木や虫、動物たち全ての生き物達こそが、やさしいまなざしの大きな相似形とも言えるでしょう。」

著者加藤多一さんとは個人的にも多少交流に恵まれた経緯もあって、リスペクトと同量の親しみの



混ざる心持ちが慢心にならぬよう自重しながらも、戦後というエポックを代表する児童文学者、北海道を題材に多くの著作をされた第一人者の加藤多一さんは、私にとっても、多一文学に触れて育った児童生徒たちにとっても、正にエカシのような存在であり、アイヌの歌物語、叙事詩、昔物語の真髄

と情動を受け継ぐ大きなお方でもあります。

作中のエカシの辛い記憶やその教示の奥深さ、そしてカメムシの悠久のつぶやき、風の声、水の姿、ふわふわたち、そしてエカシの友達のようなおじじの存在感。それらの揶揄や暗示と、現象は、児童向け故にサクッと太い彫刻刀でえぐってはいませんが、多一さんの人生観の強い信念に根ざしていて、傷ついた者たちを見て見ぬ振りには決してしないぞという精神性に貫かれ、一つ一つ、一章一章が生(ナマ)の冷静なサイエンスであり、物事の道理であ

るなあと、うなずき、うなずき読みすすみました。

この感想文を書く幸運な機会に、数年前の新緑の季節、多一さんら向学心の高いお仲間と道南へ旅した時のエピソードを一つご披露させていただきます。

上磯のトラピスチヌ修道院の一本坂を登りきった所の遅咲きの桜が見事で、私が思わず花びらに触れようとした時、多一さんが「花芯に触ってはいけないよ。大事なところだからね」と言っておいて、花卉をサクッと噛んで見せました。何事も五感を使って親しむのが流儀の多一さん。=写真右端=



生命の物語を分け隔てなく、タブーや誤魔化し無しで伝え、多数に同調、権威に迎合しないフラジャイルな(壊れやすい)個の尊厳、意識開示へ向かうエカシ多一さんの含蓄ある言葉に触れたひとときでした。

「人が育つための大切ないい土と水そして夢という種子を自分の土地の中に、そっと入れてほしい」と、あとがきにかえた手紙(テマミ)で多一さんはしたためています。この手紙をたくさんの子供たちや、その親、その祖父母、教師や大人たちが受け取ってほしいと心から願うばかりです。

自由の森を作るのは、私たちの暮しの一歩からでもあり、そして北海道開拓という名の 150 年以前の先住へ思い馳せる想像力で、知性豊かな森を繁らせてほしいと願う一冊です。

女性こそ自由に自分の人生を歩んでほしいという、主人公ポンコの女性性に照準を合わせた結びで合点の笑みが漏れました。女性は素晴らしいという多一さんの口癖を思い浮かべたからでしょう。

多一エカシ、ありがとう。

(熊谷 敬子、本会運営委員)